

〈出来事〉の生成 —— 幼児同士の「トラブル」に見る説明の妥当性について

宮内 洋 札幌国際大学人文学部
Hiroshi Miyachi Faculty of Humanities, Sapporo International University

要約

小型化・軽量化・低価格化・操作単純化されていくことによって、小型ビデオカメラ等の録音・録画機器が普及し、私たちのフィールドワークも様変わりしてきた。フィールドにおける記録は、以前よりも簡便に可能となったように見える。このことによって、フィールドにおける場面の微細な分析も可能になるなど、私たちのフィールドワークの精度も高まったかもしれない。しかし、一方で、〈出来事〉の説明の複雑化ももたらしたようにも見える。「羅生門問題」とは目撃者の人数分の状況説明の出現という事態を表象したものであるが、記録された音声と映像の入手は、一人の個人においても複数の状況説明が現れるという事態を創出したのではないだろうか。本稿は、ある幼稚園におけるフィールドワークで直面した幼児同士の「トラブル」の分析によって現れた、小型ビデオカメラが普及した現代におけるフィールドワークに関する一つの問題提起である。いわば、記録された音声と映像を手にするによって、自らの中に「藪の中」を抱え込んでしまったフィールドワーカーを狂言回しとする、一つのフィールドワーク論である。

キーワード

ビデオカメラ, 肉眼, フィールドワーク, 幼稚園児, 説明

Title

About an account of what happened: what's the relevant account of 'trouble' between children for field workers with a videocassette recorder?

Abstract

What's the relevant account of 'trouble' between children for field workers with a videocassette recorder? This notes raise the problem about field workers with a videocassette recorder. Nowadays, many field workers have used videocassette recorders for their field work. Such a circumstance carries a change of field work. A videocassette recorder made many field workers to record an occurrence more accurately and easily, and brought them closer anatomy and micro-ethnography. On the other hand, it also has made some field workers to account an occurrence in the field with much difficulty. In other words, having sounds and tape recordings made them to complex accounts of an occurrence in the field.

Key words

videocassette recorder, naked eyes, field work, preschool child, account

現実のほんの断片しか拾えないはずの機械が記録した「情報」を、より多くの情報と適切な解釈をつけ加えることによってコンテキストの中に置き、意味のある「知識」に変えて行くのは他ならぬ人間です。

(佐藤, 1992, p.215)

はじめに

私たち一人ひとりの身体がすっぽりと収まっている時空間を、ここではいったん「現実の世界」と呼ぶことにしたい。この「現実の世界」においては、共時的にいくつもの〈出来事〉が折り重なり合いながら生じているという見方もできることだろう。私たち一人ひとは物理的に限りある人間であるので、これらの数え切れぬほどの〈出来事〉すべてをありのままに知覚することはできない。後に加工された〈出来事〉を見聞きしたりして知り得る場合もあるだろうが、大半は、誰にも知覚されぬまま、〈出来事〉にはなり得なかった「現実の世界」の中の一断片として過ぎ去っていく。たとえ仮に、ある〈出来事〉を目撃したとしても、その一連の〈出来事〉を理解することは可能なのだろうか。より具体的に述べると、その〈出来事〉はどこから始まりで、どこで終わるのかということを、私たちは理解できているのだろうか。「現実の世界」の〈出来事〉は、パッケージングされた映画作品ではない。この「現実の世界」における〈出来事〉の認識とその説明という行為は、それほど単純ではない。さらに、ある〈出来事〉が誕生すると思われる場、その瞬間に運良く居合わせることがたとえあったとしても、だからといって、その目撃者は件の〈出来事〉を理解していると言えるのだろうか。先にも述べた通り、物理的に限りのある生身の身体私たち人間は、「現実の世界」全体を、細部にわたって一瞬に見ることなどできはしない。だから、私たちはいずれの〈出来事〉も偏ったかたちで断片的にしか理解できていないのかもしれない。

このように考えると、古のフィールドワーカーたちは、「現実の世界」を、自らの肉眼によって、〈出来事〉というある種の「作品」として切り取ってきたとも言えるだろう。大半の場合は、反証不可能であったために、フィールドワーカー一人ひとりの人格を信用するという承認手続きを通して、フィールドワークを方法論に置いた研究は近年まで積み上げられてきたわけである。

しかし、ビデオカメラの普及によって、様相は様変わりしたように感じられる。過去の〈出来事〉を、録音された音声と録画された映像として、私たちはいとも簡単に手に入れることが可能になったのだ^(註1)。「フィールドワーク」ということばを今日まで普及させた第一人者とも言える佐藤郁哉は、ビデオカメラについて以下のように説明している。

「カメラというのは、非常に便利な道具です。頭の中に焼きつけただけでは失われやすくまた変質しやすい視覚情報を、紙や磁気テープに記録して半永久的に保存できます。さらに、時には、私たちの日常的な視覚からこぼれ落ちてしまう情報をカバーすることもできます。同じ映像を何回も繰り返し見ることで視覚的世界を細部にまでわたって吟味することができますし、さらに拡大したり縮小することによって、思いがけない発見をすることもあります。同じように、スローモーションあるいはその逆の高速再生を活用すれば、私たちの視覚の時間的制約を越えた運動と映像をとらえることができるようになります。」

(佐藤, 1992, p.211)

山のように高く積み上げられた資料のビデオテープに埋もれるといった、一昔前では想像さえもできなかった状態が出現するほど、フィールドワークにおける録音・録画機械の使用は広まった。だが、そのような状況を手放しで喜んでばかりはおれない。私たちが、録音された音声と録画された映像をデータとして手軽に使用することによって、いくつもの問題が新たに生じてきたように思える。

筆者は、録画されたデータを何度も繰り返し見ていく過程で、ある〈出来事〉を理解そして説明することがさらに困難になっていくという体験をした。さらに、一年間のフィールドワークを通して、その理解と説明がさらにクリアになるどころか、より困難になって

いった。本稿では、このような体験を追体験的に記述することによって、ビデオカメラで録画されたデータを用いる私たちが新たに抱え込むことになった問題群を考えていきたい。

1 肉眼がとらえた〈出来事〉

まず、本稿の主題となる幼児同士のやりとりの一端について記しておきたい。本稿のタイトルの副題にも示されている通り、このやりとりは“幼児同士の「トラブル」である”という表現が可能であると現時点では思われる。筆者が重要だと認識する明確な行動は、「ある一人の男児が泣いた」ということである。彼はなぜ泣くに至ったのか。筆者が本稿を通じて求め続けるのは、まさにこの一点であるとも言える。この一点が理解されて初めて、この泣いた男児をめぐる一つの〈出来事〉として、他者に対して説明することが可能になるのであろう。

この幼児同士のやりとりに関して、もう少し説明を加えたほうが良いだろう。本稿の舞台となるのは、マリア幼稚園（仮名）である。マリア幼稚園は、1994年度に北海道内で外国籍園児がもっとも多く在籍していた幼稚園であった^(注2)。筆者はマリア幼稚園のご好意から1995年度の一年間にわたり、園内においてフィールドワークをさせていただいた。基本的には、小型ビデオカメラを手で持って撮影しながら、園児たちと園内の日常生活をともに送っていた。ただ傍観者的に撮影をしていたわけではないし、カメラを三脚等で固定して撮影していたわけではない^(注3)。筆者自らが手で持ちながら、園児たちと一緒に走り回っていたわけである。録画された画像は手振れがひどい箇所もあったので、再生して見た場合には船酔いのように気分が悪くなることすらあった。だが、筆者自身の視点にはより近いように思えるし、機動性にも富むように思われる。繰り返しになるが、筆者は園児たちに隠れて、こっそりと撮影していたわけではない。園児たちと一緒に走り回っていたので、筆者の存在は園児たちに認知されていた。単なる「カメラマン」としてではなく、いつもカメラを手を持った「ミヤウチセンサー」とし

て認知されていた。まさに社会調査法の教科書で述べられる「参与観察」であった。さらには、筆者の存在によって、マリア幼稚園の保育の場が混乱してしまうことすらあった（宮内，1998a）。筆者のマリア幼稚園におけるフィールドワークに関して、より正確に記述するならば、参与観察どころか、筆者は補助教員として教育活動の一端を担っていった。少なくとも「消極的な参加者（passive participation）」（箕浦，1999）ではなかったと言えるだろう。

マリア幼稚園は、北海道の中規模都市の中心部にあるカトリック系の私立幼稚園である。筆者のフィールドワーク当時、マリア幼稚園には年少組1クラス、年中組3クラス、年長組3クラスの計7クラスがあった。筆者がレギュラーのメンバーであったのは、年長組のα組（仮名）だった。このα組は、年少組からずっとマリア幼稚園に通園し続ける、いわゆる“生え抜き”のクラスだった。このα組には当時、27名（男児17名：女児10名）の園児が在籍していた（1995年度中途での転入児は、男女とも1名ずつの2名）。本稿の主人公とも言える「泣いた男児」も、このα組のメンバーであり、年少時から通園し続ける“生え抜き”の園児であった。

α組の一日の主なスケジュールは、表1の通りである^(注4)。

表1 α組の一日

08:15	登園開始（登園後の園児は園内で「自由遊び」）
09:15	体操
09:30	お祈りの時間
10:00	今日の課題 （課題を終えた園児は教室内で「自由遊び」）
12:00	お弁当の時間 （食べ終わった園児は教室等で「自由遊び」）
13:10	お帰りの挨拶→バス路線ごとに集合
13:40	園児全員降園

（宮内，1998b, p.158）

本稿における幼児同士のやりとりは、表1の「お祈りの時間」が終わった後に、年長組3クラスが合同で

近所の公園に出かけた際に、その公園内の砂場で生じた。その当時の様子を、筆者のモノローグとして再構成してみる。

それは、どんよりとした曇り空の日のことであった。1995年10月18日、マリア幼稚園から徒歩数分の場所にある公園の中の砂場で生じた。その時、筆者はいつものように愛用する小型ビデオカメラを用いて、園児たちのやり取りを撮影していた。砂場では、α組の男児の大半が遊んでいた。私は一緒に砂遊びを行うことは、ビデオカメラを持っている関係上、不可能だと判断し、その時は砂場からおよそ1メートルほど離れて撮影を行いながら、同時に砂場で彼らのやり取りを眺めていた。曇り空の天候のせいかもしれないが、時間が緩やかに、あまりにも緩やかに過ぎていくように感じられた。砂場の中に、彼らは山や谷やトンネル等をつくっていた。突然ゆうたがイライラした声を発しながら、たいちゃんの足に砂をかぶせるのを見た。たいちゃんはゆうたを叩いたように見えた。ゆうたは反撃をしようとしたが、結局はやめたようだった。たいちゃんはそのまま砂場を後にした。ゆうたとのりちゃんが、ビデオのレンズを土まみれの手で触ろうとした。私は触れないように注意していた。すると、「だめー」とじゅんくんが大声で言っているのを耳にした。たいちゃんがしんちゃんを押したように見えた。突然、しんちゃんが泣き出した。すると、すぐにけんちゃんが走ってきて、たいちゃんにキックした。あまりの早い展開と、3人が入り乱れた状況に、その場で何が生じていたのか、一瞬に理解することは難しかった。その後、しんちゃんの大きな泣き声に引き寄せられるように、他の園児たちが集まってきて、隣のクラスの担任のT先生がやって来た。先生は、二人によるケンカと判断されたのか、二人ともお互いに謝るようにおっしゃったようだった。

それにしても不思議だった。たいちゃんとじゅんくんとの間に何かのいざこざがあった様子だが、なぜしんちゃんが泣き出したのか。さらには、まったくの第三者とも思えるけんちゃんが、なぜ走って来て、たいちゃんをキックしたのか。このトラブルの全容について、私には妥当な説明が瞬時に浮かぶことはなかった。このトラブルは不思議な〈出来事〉として、ずっと心の中に残り続けた。」

(文中の名前はすべて仮名。以下も同様。)

現場において私たちは一体何をしているのだろうか。いくらフィールドワーカーと言えども、常に目を皿のようにして自らの周囲360°全体を一年365日もの間、1秒も休みなく見渡し続けているわけではない。たとえその現場にずっと居合わせていたとしても、何が自らの目の前で繰り広げられていたのかを説明することは、困難である場合が大半なのではないだろうか。ここから言えることは、フィールドワーカーが現場に「いる」あるいは「いた」からといって、そのことが担保として、そのフィールドワーカーたちのエスノグラフィ等を保証するか否かは、別問題であるということである。さらに言えば、「ルビンの盃」といった多義図形が示すように、たとえ同じモノを見ようとも、見る者によって、その見え方は異なることがある。ましてや操作された二次元の図版ではなく、きわめて流動的な人間同士のやりとりである。そこには始まりと終わりさえも不確かである。見る者の視点によって、その見え方はかなり異なってくるのではないだろうか。そこには見る者のこれまでの体験や経験の違いが如実に反映されているのではないだろうか。まるで芥川龍之介の短編小説「藪の中」のように、一人ひとりによって、一つの〈出来事〉として理解された内容と説明のされ方は異なるのだらう(それぞれの思いを秘めながら)。

筆者は当初、この幼児同士のやりとりから、この〈出来事〉を「排除の物語」に当てはめて理解しようとしていたように思われる。たいちゃんはやや発達の遅れがあると両親が非常に心配している子どもであった。教室内で一人歩き回ったり、自分勝手と映る行動をしてしまいがちであった。「Kは精神病だ」という衝撃的なタイトルの論文に非常に似通った〈出来事〉であり(Smith, 1978/1987)、たいちゃんを「悪者」に仕立てることによって、クラスのメンバー、少なくともクラスの男児たちが自分たちは「仲良し」であるという状況を生み出すということを意図せずに結果的に行っているのではないかという考えが、当時の私の頭に一瞬よぎった。それは、エスノメソドロジーに傾倒し、しかもそれは「エスノメソドロジストのためのエスノメソドロジー」ではなく、集団からの排除のプロセスをエスノメソドロジーという手法に寄りかかって解き明かし、「共生」へのベクトルへととらえ返そう

としていた当時の筆者の発想そのものであったと、(いま)の筆者からは言えるであろう。さらに言えば、エスノメソドロジーが誕生した時点で秘めていた衝撃力を一つの運動としてとらえた上で、次から次へと生み出されていた好井論文の数々に影響を受けていた当時の筆者の発想であったとも言える(註5)。幼児同士のやりとりをこのように理解しようとしてしまった筆者は責められるべきかもしれない。つまり、マリア幼稚園の生活世界を理解するために幼稚園内に入らせていただいたにもかかわらず、外部から持ち込んだ、しかも筆者が傾倒している「ものの見方」によって、現象を切り取るようとしていたからである。フィールドに分け入っていても、まさに内在的な理解とは程遠い、外在的な理解を筆者は行おうとしていたのかもしれない。このような理解が結論として先に保持されているのならば、わざわざフィールドに出かける意味はないであろう。

筆者のモノローグを先に示したが、その後に録画された映像を丹念に見ていくと、当初筆者が目論んでいた「排除の物語」に沿った説明はできなくなった。映し出された映像を改めて見て、筆者は驚いたことを覚えている。自分自身がいかにも目の前の状況を見ていなかったのかを痛感させられたからだ。しかも、筆者はフィールドワーカーであるとともに、マリア幼稚園では補助教員的な役割も担っていた。教員の役割を担っていた者として、園児たちの動きをほとんど見ていないことに驚かされたとともに、かなりのショックを受けた。

2 録音・録画された〈出来事〉

録画された映像を丹念に見つめていくことにより、幼児同士のやりとりは本節のように記述することもできる。表2は録音・録画されたデータを文字化したトランスクリプトである(註6)。本稿では、きわめて機械的に、30秒ごとに区切って記述していく。ただし、この時間は、ビデオテープに記録された、その当時の小型ビデオカメラが刻んだ時刻であり、外部の世界における時刻と正確に一致しているかどうかはわからない。

い。

主題となる〈出来事〉が生じた砂場は、マリア幼稚園から歩いて数分の場所に位置する公園の中にある(図1参照)。図2に示すように、砂場は直径がおよそ5メートルの円である。面積はおよそ20平方メートルである。撮影当時の砂場における園児たちの位置関係をおなじく図2に示した。概略を述べると、①のエリアにはα組の隣のクラスの男児数名がいて、α組の男児がのべ2名参加していた。②のエリアでは、本稿の記述の主要メンバーとも言えるしんちゃん、たいちゃん、そしてじゅんくん(全員がα組の男児)が白いプラスチック容器を用いて遊んでいた。③のエリアでは、けんちゃんをはじめとして、α組の男児たち5、6名が土を盛り上げたり、穴を掘るなどの作業を続けていた。この③のエリアにいた男児の大半は、同じ企業の社宅に住み、降園後も一緒に遊ぶメンバーだった。④のエリアには、奥側ではようへいくん一人が黙々と土で何かをつくっており、手前のほうではゆうたが穴を掘ったりしていた。表2では、どのエリアで生じたやりとりなのか、どのエリアで話された音声なのかをできる限り明確にさせた(表2は論文末に掲載)。

表2のように、ビデオカメラが刻印した11時33分に生じた、一人の男児が泣くという行動の前後数分間を、機械的に30秒間ごとに区切って記述した。

まず、筆者は録画された映像を見直して改めて驚いた。このわずか数分間にもあまりにも多くのやりとりが生じていたからだ。小型ビデオカメラのレンズとは別に、肉眼でとらえていた〈出来事〉は前節で記した通りであるが、それはあまりにも単純化されているとともに、そして多くの行動がまるでざるの目から水が零れ落ちるように筆者の目と耳を通り過ぎていたことがわかる。表2の通り、記述の多いセルと記述の少ないセルが生じている。子どもたちの実際の行動に対する記述者自身の認知できる能力と記述する能力に委ねられる部分も大きいだろうが、各々の時間によって子どもたちの行動に「濃淡」があることも否定できない。園児たちの目立った動きがほとんどなく、穏やかに時間が過ぎていくとみなされる箇所もあれば、短時間のうちに様々な行動が一挙に飛び出してきて、事態が急展開する箇所もある。急展開するような場面において瞬時に情報を処理できる能力があれば〈出来事〉の理

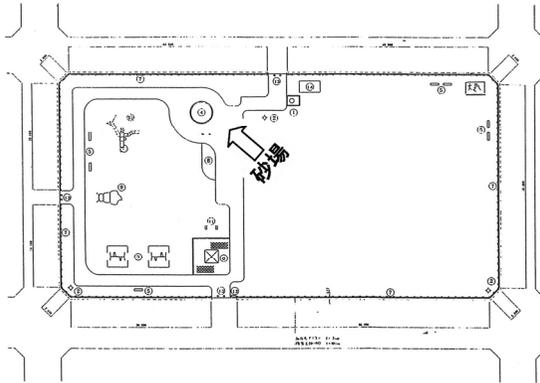


図1 公園の全体図

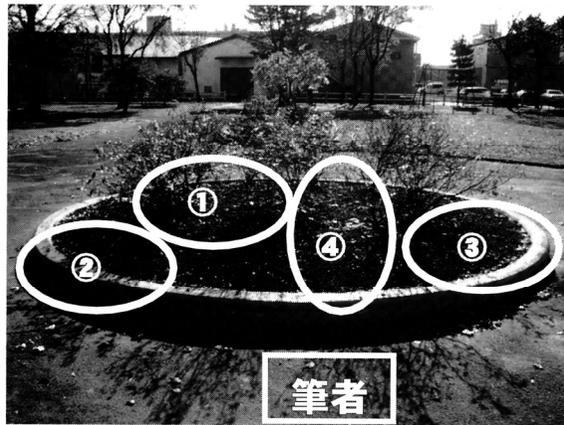


図2 砂場における園児たちの当時の位置関係

図2の画像は2003年現在の砂場の姿である。ご覧の通り、砂場は縁一杯まで黒土で埋められ、誰も立ち入れないように種々の小木が何本も植えられている。この公園のある町の老人会のメンバーによると、砂場に猫が糞をして困るという苦情が相次ぎ、老人会のメンバーが様々な策を講じたが、結局、猫の糞による被害はなくならなかったために、2003年から木々を植えたということであった。この地域の公立公園内の砂場は、猫の糞を原因とする苦情のために、次々と消え去る一方である。たしかに画像のように、小木が植えられているが、この公園は砂場が取り壊されていない珍しいケースである。

解が可能なのかもしれないが、少なくとも筆者には不可能であった。録画された映像を改めて見ることによって、園児たち間でいくつもの「トラブル」が並行して生じていることに驚かされる。そのうえ、園児たちはその「トラブル」をやり過ぎており、他者を巻き込むような大きな問題には移行させてはいない。他者を巻き込むほどの規模のものは、しんちゃんが泣

きした件の「トラブル」である。

さて、表2をもとに、一人の男児はなぜ泣くに至ったのかという先ほどの問いに答えてみたい。直接的な契機は、たいちゃんがしんちゃんの両足をつかんだからということになるのか(表2, 11:33:00-30②)。たいちゃんによる行為によって、しんちゃんは耐えら

れないほどの痛みを感じたからなのかもしれない。しかし、少なくともその場に居合わせた筆者にはたいちゃんの行為がそれほどの痛みを与えたとは思えなかった。しかも、筆者のフィールドワークで積み重ねられた知識から、ある種の違和感を感じた。つまり、しんちゃんはクラスの男児の中ではリーダー的な存在の一人であった。一人っ子であるしんちゃんは「甘えん坊」の部分もたしかにあるが、それは母親と一緒にいる家庭内に限られることであって、マリア幼稚園の世界では彼が泣くという場面は、筆者が知る限りあまり見られなかった。しかも、たいちゃんに対してやり返すこともせず、このときのしんちゃんはやられっぱなしで泣くのみであった。だから、筆者には非常に奇異に感じられたのだ。

それでは、しんちゃんが泣くに至る他の道筋があったのだろうか。この表2からは、もう一つの文脈があることが読み取れる。つまり、「白いプラスチック容器の争奪戦」という流れである。最初に、しんちゃんがプラスチック容器を持って遊んでいた。彼はその容器に土を詰めて、固めて置くといった遊びをしていた。しかし、途中でたいちゃんがそれを手に入れて、じゅんくんにもしんちゃんにも渡さずに、一人で独占していた。このように、最初にプラスチック容器で遊んでいたしんちゃんが、その執心していたモノをたいちゃんに取られてしまい、きわめて不快な状態に置かれていたために、何かのきっかけで「大泣き」という解釈も可能であろう。この場合、その直後の場面との整合性がきわめて高い。つまり、しんちゃんはプラスチック容器を取り戻すと、すぐに泣きやんで、それで遊んでいるという場面である（表2, 11:35:00-30③）。

このような「白いプラスチック容器の争奪戦」という、録音・録画されたデータを何度も繰り返し見聞きするプロセスの中で浮かび上がった一つの枠組みは、ある種の説得力を持つものである。しかし、けんちゃんが、いきなり飛び出してきて、たいちゃんを蹴るという行動まで説明できるものではない。そこには別種の枠組みが必要となろう。当日の砂場の中で展開されていた、「町づくり」とでも呼べるような共有された遊びにたいちゃんは深く関与してはいないように見えるが、そのことに対して、けんちゃんはずっと

我慢がならなかったという説明も可能かもしれない。また、しんちゃんに対するけんちゃんの熱い友情の物語として語ることも可能かもしれない。先に述べたように、しんちゃんとけんちゃんは同じ団地で生活している。彼らの父親が同一の企業に勤務しているの、その社宅である団地で暮らしているのである。彼らはマリア幼稚園内でも一緒に遊んでいるが、朝から同じバスで一緒にマリア幼稚園に登園し、降園後も社宅の敷地内の広場か互いの自宅を往き来して遊んでいる。この社宅に住む園児たちのグループのリーダー格がしんちゃんである。けんちゃんはしんちゃんに評価されたがっているように、フィールドワーク全体を通して筆者には見えた。このようなフィールドワークの経験を通して得られた知識からは、けんちゃんはしんちゃんを泣かせたいちゃんに仕返しをした、あるいは仇を取ったという説明が導き出されるかもしれない。だが、たいちゃんが裸足になったときにいち早く飛んできて、靴下を一生懸命に履かせようとしていたのは、まぎれもなくけんちゃんであった。

本節では丹念に映像を見ていったが、砂場で生じていたやりとりはあまりにも多彩で複雑であり、表2のみからは、少なくとも万人が納得できるような説明が出そうにはないようである。結局は、筆者による一年間のフィールドワークで得られた知識に基づいた説明が顔を見せてしまう。さらに、その知識によって導き出されたいくつもの説明も、理解可能な一つのストーリーとしては結実せずに、細かな断片的な説明が並行して立ち並びながら、折り重なり続けるといった状況が続くように思われる。

3 男児の母親の語りから浮かび上がった 〈出来事〉

前節では、録画されたデータをもとに筆者が作成した表2から、しんちゃんが泣くに至った説明を試みた。だが、正しくは、表2のみからの説明ではない。筆者によるマリア幼稚園での一年間のフィールドワークから得られた様々な知識を交えながら、いくつかの解釈を行うことによって、妥当な説明を探したに過ぎない。

この部分に、録画されたデータが日常的に用いられる近年における一つの問題が姿を現している。録画されたデータのみ分析によって〈出来事〉の説明は可能か、という問いである^(註7)。昨今、日本国内でもエスノメソドロジー・会話分析は浸透し、きわめて特殊な変わった方法であるといった不理解に基づく蔑視はほとんど消えたと言えるだろう。しかも、社会学の中の「異教徒」的な扱いの時代を経て、今日では社会学のみならず、心理学・教育学・工学・法学等の様々な領域で認知されるに至った。このことによって、録音されたデータもしくは録画されたデータをエスノメソドロジーという視角に基づき分析するといった研究スタイルが急速に広まった(心理学領域の生態学的なアプローチの分野では以前よりポピュラーではあったが)。だが憂慮すべきは、これらの録音・録画されたデータをただマニュアル通りにエスノメソドロジー風に分析すれば、「1本の論文」になるといった安易な態度も一部に見られることである。しかも、データの採集された時期と場所が特定されないものまでたまに見られる(確かに目的が異なる側面もあろうが)。データが採集された時期と場所、つまりはそのデータの文脈が理解されてはいないにもかかわらず、録音された音声・録画された行動の説明が果たして可能なのだろうか。データの「内部」に限った分析に、「外部」の視点を持ち込むべきではないという立場もあることだろう。この場合の「内部」とは何か。「外部」とは何か。果たして、その境界線は存在するのだろうか^(註8)。

件の〈出来事〉の場合を考えてみたい。泣いた男児は、11時27分から11時37分の間のみ生きていたわけではない。それ以前に、母体から誕生してから、さらには受精してから1995年10月25日11時27分に至るまでの数年間が確かに存在する。そして、11時37分以降も、この世界で生活している。今日に至るまで、途中、父親の転勤によって日本国を離れることがあったが、生活はまさに〈いま〉も続いている。少なくとも、1995年10月25日においても、11時27分以前の何らかの要因が、しんちゃんの大泣きに関与している可能性は否定できはしない。しかし、録音・録画されたデータに基づく分析は、そのような可能性を捨象せざるを得ない。非常に限定された情報、つまり記録された音声と映像でもって臨むしかないのである。

私たちは以上のことを十分に理解している。筆者の場合は、偶然に件の〈出来事〉の前に生じていたことを聞く機会があった。逆に、その貴重な機会によって、さらに悩まされることになったとともに、本稿を書く契機となったわけである。

具体的に述べると、筆者は上記の通り、マリア幼稚園に一年間の間、補助教員の役割も担いながらお邪魔させていただいた。とくに、“生え抜き”のα組に通園させていただいた^(註9)。一年間の経験から、園児たちの名前を覚えるのはもちろんのこと、互いの行動の特徴もある程度は理解し合えたように思える。そのみならず、実際に各々のご家庭にお邪魔させていただき、園児の母親に対して聞き取り調査も行った(宮内, 2003)。調査拒否は1人もなかったので、26人全員にうかがうことができた(α組には一組の一卵性双生児がいた)。基本的には、それぞれのご家庭にお邪魔させていただいたうえで筆者と一対一の面接調査というスタイルで行なった。お一人お一人の了承を得たうえで、筆者とのやり取りはテープレコーダーに録音した(1人のみ拒否)。当初はお一人に対しておよそ1時間という前提で調査は行なわれたが、予定の時間を大幅に超える場合が多く、4時間を超える場合もあった。面接調査場面においては、子どものいじめや問題行動・子どもの身体の発達にまつわる問題・母親自身の夫婦関係に関する相談を受けることが少なくなかったが、そのことが予定の時間を大幅に超えた主な理由であるとともに、面接調査場面における雰囲気や調査者と非調査者の関係性についての判断材料を提供することになるのかもしれない。先にも述べたが、しんちゃんとけんちゃんと同じ団地で生活しており、降園後も仲良く遊んでいることや、その遊んでいる様子等も、この調査で知り得たし、実際に肉眼で確認することができた(筆者の肉眼が信頼できるか否かは別問題であるが)。

しんちゃんの母親は、マリア幼稚園の「保護者の会」の役員であった。だから、マリア幼稚園の行事の際には必ずスタッフとして参加されていた。筆者の幼稚園生活における保護者との会話の中では、しんちゃんの母親と話す機会がもっとも多かった。非常に社交的・外向的で、好奇心が強いように筆者には感じられたが、そのような志向性ゆえからか、筆者のフィール

ドワーク時には、幼稚園の中でもよく声をかけてくださった。しんちゃんの母親は3年間も役員を努められていたので、マリア幼稚園のいわゆる「事情通 (the wise)」（Goffman, 1963）と呼ぶに相応しい存在であった。筆者にとって、しんちゃんの母親は、文化人類学の領域で言われる、まさに「インフォーマント (informant)」、しかも重要なインフォーマントであった。そのしんちゃんの母親によると、件の〈出来事〉の当日、しんちゃんは朝から熱っぽくて、かなりぐずっていたらしい。しかも、幼稚園にあまり行きたがらなかったという。つまり、しんちゃんは当日の朝から体調が悪く、気分が晴れずに、泣きたいような要因に満ち溢れていたとも説明できる。件の〈出来事〉の当事者がこの世に生まれた瞬間から（いや、それ以前からも）ずっと寄り添い続け、この当事者を見守り続けた一人の女性のことは重みを持っている。他のいくつもの説明が吹き飛んでしまうかのような決定的な説明であるように思える。

さらに、それらを後押しするような〈出来事〉が後に生じている。表2で記述した後の11時47分にしんちゃんは再び泣いているのである。しんちゃんが再び当事者となって、同じ社宅に住んでいるα組の男児（表2では登場してはいない）との間に「トラブル」が発生していたのである。このような経過を見ていくと、ますます母親の語りから生まれた説明は説得力を増す。しかし、件の〈出来事〉の説明として決定してしまうにはいまだとまどいがある。

4 おわりに

フィールドワークにおいて、これまで問題とされてきたものの一つは、いわゆる「羅生門問題」と呼ばれてきた問題、より正確に述べるならば、芥川龍之介によって短編小説「藪の中」で提起された、「藪の中間問題」と呼ぶほうが相応しい問題である^(註10)。すなわち、ある〈出来事〉を当事者も含めた人たちが語る。しかし、各自の説明は異なっていた。共通の一つの〈出来事〉であるにもかかわらず、各自の説明は異なっているという状況を表現したのが、「藪の中」であ

る。この際、私たちは誰を、何を信用すれば良いのだろうか。そして、私たちはどのような説明をすれば良いのだろうか。映画『羅生門』において黒澤明監督は、彼なりの解答を示したが（解釈は分かれようが）、フィールドに佇む私たちはいったいどうすれば良いのだろうか。実際に私たちは、たとえこの問題に対して明確な解答を正面から提示することはなくても、様々な可能性を示しながら、論文や著書や報告書といったかたちで一定の解答を示し続けている。

本稿では、一人の男児に焦点を絞って、〈出来事〉の認識と説明の問題について述べた。つまり、ビデオカメラの普及によって、私たちは現在、容易に録音もしくは録画されたデータを入手できる環境にあることが多い。何度も繰り返し再生することによって、肉眼等では見逃していた行動を後から発見することができるようになったり、肉眼等ではとらえることができなかったきわめて微細な行動も観察が可能になった。このように非常に便利になった反面、新たな問題を抱えることにもなったのではないだろうか。つまり、私たちはかつては肉眼等によって、ある〈出来事〉をとらえてきたが、ビデオカメラを携えた私たちは録画された映像を何度も何度も繰り返し見ることによって、〈出来事〉が私たちの中で変容していくという体験をし始めたのではないだろうか。当然のことながら、記録された映像そのものが勝手に組み変わっていくことはない（変色等はあるだろうが）。しかし、見ている私たちの枠組みが映像の読み込みによって変容を重ねていくうちに、〈出来事〉も揺らぎ始めるのである。さらには、記録された映像のみならず、長期間のフィールドワークによって蓄積された体験と経験によって、〈出来事〉は何度も揺らぎ続けるのかもしれない。

私たちは、フィールドにおいて、「藪の中」に放り込まれて呆然としている場合ではない。私たち一人ひとりが、記録されたデータを媒介にして、フィールドワークと音声・映像の分析の経験の深さと長さによって、新たな「藪の中」を抱え込むことになったのである。

つまり、ビデオカメラの普及によって、新たな問題が出現したわけである。録音・録画されたデータを何度も繰り返し見ることによって生じる一個人の中の解釈のズレ、これらのデータを倍速やスローモーション

や逆回転で見たりすることによる発見から生じる一個人の中の解釈のズレ、これらのデータの他にフィールドワークによって生じる一個人の中の解釈のズレといった、一個人の中の解釈の問題である。これは、既存の「羅生門問題」のような他者との認識の競合の問題とは別種の問題であろう。記録されたデータが持ち込んだ〈個人の中の超時間的な「藪の中」〉とでも呼べば良いのだろうか。録音・録画機器は、私たち研究者にとって研究活動を進めていく上で、きわめて重要な役割を果たしている。だが、非常に便利になったと同時に、別種の新たな問題も抱え込むことになってしまったようである。本稿の冒頭で引用した佐藤郁哉は、カメラについて以下のように戒めてもいる。

「カメラに限らず、フィールドに機械を持ち込む時におきやすい最大の誤解は、次のようなものです——〈機械を使えば人間の主観的解釈が入り込む余地が少なくなり、人間の不確かな知覚や記憶の歪みからも自由になり、したがって「客観的な情報」が手に入る〉」（佐藤，1992，p.214）

私たちは、機械を手にするによって、どうやら自由にはならなかったようである。逆に、ますます霧深い「藪の中」に迷い込む結果となったのかもしれない。一個人の中にも、いくつもの「主観的な解釈」が林立している。このような場合に、私たちは、いかにして、どの解釈を選ぶのか。その際に決定的な要因となるのは何なのか。もはや私たちは〈出来事〉を語ることはできないのであろうか。

さて、本稿を終えるにあたり、この問題群は、保育現場の日常生活における問題と連なっていることを申し添えておきたい。本稿は、「フィールドワーク」という特殊な領域における理論的な問題のみには終わらない。表2において、しんちゃんが泣き出す前に、ゆうたとのりちゃんが土の付いた汚れた手で筆者のビデオカメラのレンズを触ろうとしていたことが述べられている（表2，11時31分からのおよそ1分間）。このように、保育現場における保育者は常にのんびりとは構えてはいられない（四六時中はビデオカメラは持っていないにせよ）。常にとっても良いほど、子どもたちからの働きかけを受け続けている。1，2人の子どもにも意識を集中し続けることは（保育環境にもよ

るだろうが）かなり困難であろう。ゆえに、何かが生じた際に、見間違いや誤解が生じやすいということになりはしないだろうか。少なくとも、そのような環境にある保育者は多いのではないだろうか。仮にそうだとすると、保育現場で生じた〈出来事〉を理解した上に、その原因を説明するという行為はきわめて難しいのではないだろうか。しかも、子どもたちの親に〈出来事〉を説明せざるを得ない状況になった際に、「正しい説明」を行うことは果たして可能だろうか^(註11)。常に誤解をする危険性がつきまとっていると考えておいたほうが良いのではないか。本稿でなされた問題提起は、フィールドワーカーのみに限定される特殊な問題ではない。確かに教育・保育実践者とフィールドワーカーを一緒に論ずることは乱暴ではあろうが、〈出来事〉の説明の妥当性の問題は、保育現場の保育実践者にも毎日のように突きつけられた問題であるとも言えるだろう。さらには、法化社会へとさらに進行しているようにも見受けられる日本社会において、〈出来事〉の説明は今後ますます重要性を増すことが予想されるとともに、私たちの社会生活、さらには人生をも左右するきわめて切実な問題に膨れあがっていく可能性も持っている。

表2 園児たちの言動

時間	場 所				
	①	②	③	④	その他
11:27:00~	α組の男児を一人含む、5人で黙々と穴を掘っている。		けんちゃん「もう許さねー」 けんちゃん「絶対(聞き取れず)、もう許さねー」	たいちゃんが砂場に入って来た。砂場の中央部を歩いていく。高く積み上げられ固められた土の山などを踏んでしまう。 ようへい「ふんだー、あーふんだー」 ゆうた「あー」 ようへい「ふんだー」 まなどの背後で、けんちゃんがたいちゃんを蹴っているようにも見える。 けんちゃん「えー、たいちゃん、やってないよー」 けんちゃん「たいちゃん。砂かけるよー」 たいちゃん「やだあ」	まなどが滑り台について筆者に話しかけてくる。まなどが画面一杯に映る。音声も、まなどの声しか聞こえなくなる。
11:27:30~		じゅんくん、たいちゃ	けんちゃん「ぼくたち、お家つくってるからー」(大声で) けんちゃん「しんちゃん、しんちゃん、ぼくたちお家つくってるからー」(大声で)	たいちゃん「やだー砂かけないでー」 けんちゃんがたいちゃんに砂をかけている。 たいちゃん「やだー」 けんちゃん「じゃー(聞き取れず)出ていってー」 二人のすぐ側で、ゆうたが「おー、おれ自分で踏んじゃった」と二人を茶化すような仕草をしている。 ゆうた「ねえ、けん〇〇くん、おれ自分で踏んじゃった(語尾上げる)」(注:けん〇〇は正しい名前) たいちゃんが急に立ち上がる。	

		<p>ん、しんちゃんの三人が砂場の縁に腰掛けている。</p> <p>しんちゃん「たいちゃん、これこわさないでね」 たいちゃん「わかった」 じゅんくん「(聞き取れず)」</p>			
11 : 28 : 00~	<p>まなとが棒で土を跳ね上げている。</p>	<p>しんちゃん「ぼくねー、やり方知ってる。誰かにやり方、教えてあげろ」(立ちあがりながら)</p> <p>しんちゃんが白いプラスチック容器に土を詰め込みながら、じゅんくんと二人で笑顔で話している。</p> <p>たいちゃんは、筆者をちらちら見ながら、笑いながら、靴を脱ぎ、次に靴下を脱ぎ始めた。</p> <p>たいちゃん「おれ、裸足になる、裸足に」</p>		<p>ようへい「誰か砂かけたー」</p>	
11 : 28 : 30~		<p>裸足になって嬉しそうな表情をしているたいちゃんの右手が、砂場の縁に置かれていた、白いプラスチック容器で形作られたプリンのような形に固められた土を潰してしまう。その瞬間、すまなそうな表情をするたいちゃん。 たいちゃん「あっ、潰れちゃった。・・・ごめん、ごめんなさい」(小声で) しんちゃんが見にやって来た。じゅんくんは驚いた表情をしている。 しんちゃんは確認しただけで戻っていった。後ろ向きなので、表情はわからない。 じゅんくんが笑う。たいちゃんも一緒に笑った。</p> <p>たいちゃん「はだしー、おれは裸足になっ</p>	<p>けんちゃん「裸足ダメー、たい〇〇ちゃん」</p>		<p>?「あっ、たい〇〇ちゃん裸足だ」 (注:たい〇〇は正しい名前)</p>

		<p>たんだー」</p> <p>しんちゃん「やったげる」 一心に土をプラスチック容器に詰め込もうとするじゅんくん。 じゅんくん「あれ」 しんちゃん「やったげる」</p>			
11:29:00~		<p>じゅんくんは、しんちゃんにプラスチック容器を貸す。しんちゃんはその容器に土を詰め込んでいる。</p> <p>たいちゃん「おれは裸足になったー、はだしー」</p> <p>けんちゃんがやって来て、たいちゃんに靴下を履かせようとする。何度も靴下を履かせようとする。</p>			<p>?「あー」 ?「おらのー」 ?「そうじゃないよー」</p>
11:29:30~		<p>この間に、たいちゃんがプラスチック容器を手に入れる。</p> <p>じゅんきくん「これがプリン。これメニュー、メニュー。これはー」</p> <p>たいちゃん「いやー」</p> <p>じゅんきくん「これが普通のプリン」</p>		<p>ゆうたがたいちゃんに土をかける。</p> <p>ゆうたがたいちゃんに土をかける。</p>	<p>α組の女兒が筆者のもとに来て、衣類を預かっておくように無言で促す。しかし、筆者はそれを地面に落としてしまい、「あーごめん」と謝る。</p>
11:30:00~		<p>たいちゃんがプラスチック容器に土を入れている。</p> <p>ゆうた「じゃあ、入れたげる」 ゆうた「うー、うっー」(大声で)</p> <p>ゆうたがたいちゃんの足に土をかぶせる。 たいちゃんは笑っている。</p>			

		<p>ゆうた「(聞き取れず)てー」</p> <p>じゅんくん「固まりが(聞き取れず)」</p> <p>しんちゃん「何でー」</p> <p>ゆうたが再び、高い声を発しながら、たいちゃんの足に土をかぶせる。</p> <p>たいちゃんが右手でゆうたの頭を押しやる。さらに左頬も押しやる。</p> <p>ゆうたは反撃する素振りを見せるが、行わなかった。</p> <p>ゆうたはそのまま土をかけ続けている。</p> <p>たいちゃんは笑っている。</p>	<p>けんちゃん「ちょっとー、ちょっとしんちゃん、これやまにしてー」(大声で)</p>		
11:30:30~		<p>ゆうたは立ちあがりながら「けいたちゃん、聞いてー」</p> <p>たいちゃん「(聞き取れず)」</p>		<p>ようへい「なかもとあきらちゃん、やめたんだってー」</p>	
11:31:00~		<p>たいちゃんは白いプラスチック容器を手をしている。そして、裸足のまま、砂場の外に出る。靴が取り残されている。</p>	<p>ゆうたが突然立ち上がり「ねえ見せてー」</p>		<p>?「これ、おらの川だからー」</p> <p>砂場の園児たちがざわざわと、砂場の外に出ていく。誰かが、「大当たり」と書かれた何かを拾った様子。口々に「見せてー」</p>
11:31:30~					<p>ゆうた「ねえ見せてー」</p> <p>砂場に戻ってきたゆうたとのりちゃんがビデオカメラのレンズに、土のついた手で触れようとする。触れてはいけないと注意する筆者との攻防戦が展開される。その間、砂場で何が生じているのかが見えない。</p>
11:32:00~					<p>ゆうた「ねえ、ちょっと貸して」(甘えた声で)</p> <p>筆者「ダメダメ」</p> <p>ゆうた「んっんっん」</p>

					つ」 ゆうた「のりくん、やめてー」(大声で) 筆者「土のついた手で触っちゃダメだー」 ゆうた「うん」 画面一杯に土だらけの手が映し出される。 筆者「うっそー」 二人はカメラから離れる。
11 : 32 : 30~		<p>たいちゃんは先ほどまでいた砂場の縁に座っていた。隣に座っているじゅんくんは、不服そうな表情をしながら、たいちゃんが先の容器で遊ぶ姿を見ている。</p> <p>じゅんくん「あと一回」 じゅんくん「だめー」 たいちゃんがプラスチック容器を動かしながら「これ、おれの(聞き取れず)」 じゅんくんが「だめー、だめー」と大声を出して、こちらを見る。</p> <p>しんちゃんが小枝を持ちながら、たいちゃんの前へやって来た。</p>	けんちゃん「ちよつと一、ここにもホテルあるのねー」(大声で)	ようへい「宮内センセー」	
11 : 33 : 00~		<p>じゅんくん「いやー、まだー」 しんちゃん「ずるー、もうダメー」 しんちゃん「もう、よしなー(聞き取れず)」 たいちゃん「いやだ」(小声で)</p> <p>しんちゃんは、プラスチック容器を使い続けるたいちゃんの目の前に左足を少し出した。 たいちゃんは突然立ち上がり、しんちゃ</p>	<p>けんちゃん「しんちゃん、しんちゃん、ここにもホテルあるのねー」(大声で)</p> <p>けんちゃん「あつそうだー、町とかホテルとかつくるう」(大声で)</p>		

		<p>んの両足太股を両手で強くつかんだ。</p> <p>しんちゃんは大きな声で泣き始めた。</p> <p>たいちゃんが一瞬筆者の方を見た。</p> <p>けんちゃんが走ってきて、たいちゃんの右脇腹辺りを無言で右足で思いつき蹴る。</p>			
<p>11 : 33 : 30~</p>		<p>のりちゃんがやって来る。砂場の縁にあったプリンのかたちに固められた土を踏んでいる。それを踏み続けながら、たいちゃんの近くに座る。</p> <p>けんちゃんがたいちゃんの背中をもう一発蹴る。</p> <p>たいちゃん「ごめんねー」 しんちゃん「許さない」(泣きながら、大声で)</p> <p>けんちゃんがたいちゃんの背中を蹴り続ける。</p> <p>「ごめんねー」と言いながら、たいちゃんはしんちゃんの頬を両手で挟む。</p> <p>しんちゃん「許さない」(泣きながら、大声で)</p> <p>けんちゃんがたいちゃんの背中を思いつき蹴る。</p> <p>たいちゃん「ちょー、けんないでー」(大声で) しんちゃん「いたーい」(泣きながら、大声で) たいちゃん「ごめんねー」</p> <p>のりちゃんが走って、その場から立ち去る。</p>			

		<p>けんちゃん「たいちゃん、やり返しても良いんだよ」 たいちゃん「謝ってるんだよー」</p>			
11:34:00~		<p>けんちゃん「たいちゃん、やり返しても良いんだよ」 たいちゃん「いやだよ」(小声で) けんちゃん「じゃあ、(聞き取れず)」(ずっと、たいちゃんの左肩を軽く蹴り続けながら)</p> <p>女兒が一人近寄ってくる。「どしたの」</p> <p>この間、白いプラスチック容器は土の上に置かれたまま。 けんちゃんがたいちゃんを蹴り続ける。</p> <p>たいちゃん「やのしんちゃん、ごめんねー」と謝り続ける。</p> <p>のりちゃんが再び現れる。</p> <p>たいちゃんは再び、しんちゃんの頬を両手で挟みながら、「ごめんねー」と謝る。</p> <p>たいちゃん「やのしんちゃん、ごめんね」(大声で)</p> <p>様々な園児たちが集まってくる。「どうしたの」</p>			<p>？「ねえ、どうしたの。やのしんちゃん、どうしたの」 筆者「二人でケンカしちゃったの」 ？「何やったのか聞かして」 筆者「ん」</p>
11:34:30~		<p>T先生がやって来る。 T先生「やの怪獣ですか」 たいちゃん「やのしんちゃんが、ぼくのつくった(聞き取れず)こわしたんだよ、やのしんちゃんが」(大声で)</p> <p>右足でたいちゃんを蹴る続けるけんちゃん。</p> <p>T先生「それで、やの</p>			

		<p>しんちゃんが怪獣になっちゃったの」 しんちゃん「ちがうー、あのちよつと、触っただけなのにねー」 T先生「はい」 しんちゃん「(聞き取れず)たいちゃんがねー(聞き取れず)」 T先生「まだ痛いの」</p>			
11:35:00~		<p>たいちゃん「ごめんねーって謝ってんのにー」 T先生「しんちゃん(聞き取れず)」 たいちゃん「ちゃんと謝ったのにねー、やだーって言ったんだよ」(大声で)</p> <p>けんちゃんは、たいちゃんの頭を後ろから両手で押している。</p> <p>しんちゃんは白いプラスチック容器をすばやくつかみ取り、③へ移動した。</p>	<p>しんちゃんはもう泣いてはおらず、プラスチック容器で土を固めている。</p>	<p>後ろを振り向き、けんちゃん「あーーー」(大声で) 他のクラスの男子が何かを踏んだらしい。</p> <p>けんちゃん「あーーー」(大声で)</p>	
11:35:30~		<p>たいちゃんはT先生の隣で小さな声で話をしている。</p>	<p>T先生は、「いつまで泣いてるの。仲直りしたの、しんちゃん」と言いながら、しんちゃんのところに行った。</p>		
11:36:00~		<p>たいちゃん「やのしんちゃんに『ごめんねー』と言ったのに、謝ってくれなかった」</p> <p>T先生に促されて、しんちゃんはゆっくりとたいちゃんの側へ行く。 たいちゃんは穴を掘り続けている。</p>	<p>T先生「しんちゃん、仲直りしたの？」</p> <p>T先生「たいちゃんと話してごらん」</p>		
11:36:30~		<p>しんちゃん「あーー」(③の方を見ながら)</p> <p>たいちゃんはしんちゃんの方を見た。</p>			

		<p>しんちゃんは、たいちゃんのやや右後方に立ちながら、もじもじしている。T シャツの裾を持ち上げて、お腹を丸出しにしながら、くねくねと身体を揺らしている。</p> <p>しんちゃん「なに？(聞き取れず)」 しんちゃん「してないよー」 たいちゃん「したよー」 しんちゃん「ちがうよ。したのは、けんちゃんだよ」 たいちゃん「ちがうよ。まーちゃんだよ」 しんちゃん「ほんど？」 たいちゃん「まーちゃん(聞き取れず)」</p>	けんちゃん「ぼくやっ てないよー」(大声で		T 先生は、女兒たちに連れられて、砂場から離れていった。
11:37 :00~					<p>？「あたりー」</p> <p>多くの園児たちが同じ様なトーンで話をしており、焦点化できなくて、聞き取れない。</p>
11:37 :30~		<p>たいちゃん「ひろせちゃんがいじめたんだよーぼくを」(大声で) (注:ひろせはけんちゃんの名字)</p> <p>たいちゃん「誰かー」</p>	<p>けんちゃん「ぼく、やっ てな」 けんちゃん「ごめん ねー、ごめんねー」</p> <p>しんちゃんは、たいちゃんから離れて、プラスチック容器で遊ぶ。</p>		

付記

本稿は、1994-1996年度および1998-2000年度文部省科学研究費補助金・特別研究員奨励費による研究成果の一部である。幼稚園を中心としたいくつものフィールドワークを可能にさせていただいた日本学術振興会に感謝致します。

そして何よりも、筆者を受け入れてくださった当時のマリア幼稚園の皆様方に心より感謝申し上げます。

また本稿は、1999年1月23日午後北海道大学教育学部附属乳幼児発達臨床センター（現・北海道大学大学院教育学研究科附属乳幼児発達臨床センター）で開かれた第2回相互行為分析研究会で報告した内容をもとにしている。その際の報告内容は、どこにも投稿せずに、その後ずっと心中で暖め続け、ふさわしいと思われる発表メディアを探し求め続けていた。その数年後に本誌が誕生し、しかも「フィールドワーク特集」という、本稿にもっともふさわしい発表の場を得られたことを心から感謝したい。他の査読誌では、本稿は理解していただけなかったように思えてならない。原稿にも、本稿のような「幸福な出会い」があるものと信じている。

注

- 1 ただし、いつでも、どこでも録音と録画が可能というわけではない。「対象」とされる人たちの了承が得られなければ、カメラの持ち込みが許されないことは言うまでもない。だが、たとえ了承が得られたとしても、カメラの参入によって、フィールドに混乱を生じさせることもあることに注意したい。詳しくは、宮崎（2001）などを参照のこと。また、撮影の了解が得られて、撮影が順調に進んでいても、研究上においてもっとも重要な場面が録画できるわけでもない（たとえば、Jordan, 1993/2001）。
- 2 このデータは、筆者が独自に行った北海道における調査によって得られたものである。この調査から、調査当時は「ニューカマー」の園児を中心に、途中入園・退園が頻繁で、月ごとにおいても外国籍園児の在籍者数が増減していることがわかった（宮内, 1997）。『学校基本調査報告書』で確定されている数値の背後には、数値としては現れてこない様々な動向があることが推測できる。
- 3 石黒は、三脚で固定して撮影することの利点として、①場面全体を撮ることができること、②次第にカメラへの注目を弱めることができることを挙げている（石黒, 1999, pp.16-17）。

- 4 マリア幼稚園の一日の生活に関する詳細は、宮内（1998b）を参照していただきたい。補足すれば、日本国内のすべての幼稚園が同一のタイムスケジュールで動いているわけではない。できれば、宮内（1999）と比較していただきたい。
- 5 好井（1999）、さらに山田・好井（1998）など。
- 6 多くの研究者が指摘するように、「完全なトランスクリプト」の作成は不可能である。だからといって、分析者による恣意的な削除などという行為は許されるべきことではないだろう。この点に関しては、一つの事例をもとに、好井（1994）が興味深い論を展開している。
- 7 本稿では少し触れるにとどめておくが、ここにはいくつかの重要な問題が隠れている。撮影者（もしくは、その現場にいた調査者）と分析者が同一人物であるか否かという問題、そして分析者は何者であるのかという問題である。前者に関しては、たとえば石黒は、その現場にいたことによって、「その場にいなかった者には理解できないようなビデオの中の発話の意味も理解できることがある」一方で、「視聴覚データを冷静に『読み込む』ことをできなくさせるという危険性」も同時に指摘している（石黒, 1999, p.4）。後者の問題に関しては、これまでは分析者が研究者以外の何者でもないという前提で論が進行することが多かったが、「実践者」と「研究者」というポジションが別個の独立した人格である時代は終焉を迎えた。大学及び大学院における社会人入学制度の普及によって、「実践者」であり、かつ「研究者」であるという人たちは増えている。このような人たちにおいては、かつての「実践者」と「研究者」の対立の構図が、個人の内部で心理的な葛藤として抱え込まれているのかもしれない。
- 8 好井（1994）は、「螺旋運動としてのエスノメソドロジー」という魅力的なフレーズのもとに、この問題における解決への一つの道筋を示している。
- 9 正確に述べると、このフィールドワーク以前に、北海道における外国籍園児が在籍していた幼稚園への調査の際に、マリア幼稚園にはお邪魔しており、その場でα組の園児たちの一部にはすでに出会っている。
- 10 黒澤明監督による映画『羅生門』（1950年）に言及した「羅生門問題」を論じたものとして、池宮（1993）、浜（1995）、やまだ（1996）などがある。なお、筆者は、映画『羅生門』ではなく、同じく「藪の中」を原作とした映画『MISTY』（三枝健起監督、1997年）を用いながら、講義等でいわゆる「羅生門問題」について論じてきた。例えば、琉球大学教育学部においては「藪の中」からの抜け出し方」というテーマで集中講義を行わせていただいたことがある。この「羅生門問題」、「藪の中間問題」に関しては数編の別稿を準備している。

11 筆者が実施した日本国内の各幼稚園での聴き取り調査の結果によると、幼稚園教諭たちがストレスとして認識しているのは子どもたちとの関係ではなく、保護者たちとの関係が大半であった。たとえば、園内で生じた園児同士の「ケンカ」をどのように当該園児の保護者に説明すれば良いのかに関して悩んでおられた。このことに関しては、稚内市幼児教育研究協議会保育研修部会講演会において「幼児教育の現場における〈おとな-子ども〉と〈おとな-おとな〉をめぐる問題について」と題して、お話しさせていただいたことがある。

引用文献

- Goffman, E. (1963). *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*. New Jersey: Prentice-Hall, Inc. (Goffman, E. (1987). スティグマの社会学: 烙印を押されたアイデンティティ (石黒毅, 訳). 東京: せりか書房.)
- 浜日出夫. (1995). エスノメソドロジーと「羅生門問題」. *社会学ジャーナル*, 20, 103-112. 筑波大学社会学研究室.
- 池宮正才. (1993). それぞれの「現実」: 行為の理解と社会的現実. 山中速人 (編). *ビデオで社会学しませんか* (pp.37-56). 東京: 有斐閣.
- 石黒広昭 (編). (2001). *AV 機器をもってフィールドへ*. 東京: 新曜社.
- 石黒広昭. (2001). フィールドリサーチにおける AV 機器—ビデオを持ってフィールドに行く前に. 石黒広昭 (編). *AV 機器をもってフィールドへ* (pp.1-25). 東京: 新曜社.
- Jordan, B. (2001). 助産の人類学 (宮崎清孝・滝沢美津子, 訳). 東京: 日本看護協会出版会. ((1993). *Birth in four cultures: A crosscultural investigation of children in Yucatan, Holland, Sweden, and the United States*. Illinois: Waveland Press.) .
- 箕浦康子. (1999). フィールドワークの基礎的スキル. 箕浦康子 (編). *フィールドワークの技法と実際* (pp.21-40). 京都: ミネルヴァ書房.
- 宮内洋. (1997). 外国籍園児が在籍する北海道の幼稚園. *季刊子ども学*, 17 号, 116-123, 東京: ベネッセコーポレーション.
- 宮内洋. (1998a). 外国籍園児のカテゴリー化実践. 山田富秋・好井裕明 (編). *エスノメソドロジーの想像力* (pp.187-202). 東京: せりか書房.
- 宮内洋. (1998b). 「韓国・朝鮮」籍の子どもが通う日本の幼稚園: エスノグラフィ的記述におけるひとつの試みとして. 志水宏吉 (編). *教育のエスノグラフィ* (pp.151-171). 京都: 嵯峨野書院.
- 宮内洋. (1999). 沖縄県離島部における幼稚園生活のエスノグラフィ的覚え書き. *北海道大学教育学部紀要*, 78, 111-146 (後に, *心理学の新しい表現法に関する論文集*, 第8号, に再録)
- 宮内洋. (2003). 子どもたちはマリア幼稚園で何を学んだのか?: マリア幼稚園母親調査をもとに. *札幌国際大学紀要*, 34, 145-153.
- 宮崎清孝. (2001). AV 機器が研究者によって実践に持ち込まれるという出来事: 研究者の異物性. 石黒広昭 (編). *AV 機器をもってフィールドへ* (pp.47-73). 東京: 新曜社.
- 佐藤郁哉. (1992). *フィールドワーク*. 東京: 新曜社.
- Smith, D. (1978). K is mentally ill: The Anatomy of a Factual Account. *Sociology*, 12, Vol.1, 23-53. (Smith, D. (1987). K は精神病だ: 事実報告のアナトミー. 山田富秋・好井裕明・山崎敬一 (編訳). *エスノメソドロジー* (pp.81-153). 東京: せりか書房.)
- 山田富秋・好井裕明 (編). (1998). *エスノメソドロジーの想像力*. 東京: せりか書房.
- やまだようこ. (1996). 映画「羅生門」にみる証言の場の多重性: 当事者・目撃者・傍観者の語り. 菅原郁夫・佐藤達哉 (編). *現代のエスプリ. 目撃者の証言: 法律学と心理学の架け橋* (pp.188-194). 東京: 至文堂.
- 好井裕明. (1994). 螺旋運動としてのエスノメソドロジー. *社会情報*, 第3巻第2号, 91-103. 札幌学院大学社会情報学部.
- 好井裕明. (1999). 批判的エスノメソドロジーの語り. 東京: 新曜社.

(2003.6.30 受稿, 2003.11.28 受理)